

明日への扉

No.14

畜産のイメージを

私
が
変
え
たい



上別府 美由紀さん

昭和56年鹿屋市生まれ。鹿屋農業高校畜産科を卒業後は県外へ進学。帰郷後は実家の上別府種畜場に就職するも23歳で独立。肝属地区の若手女性畜産農家6人で結成した「きもつき^{アイラブきもつき}♥牛」の初代会長。現在は繁殖農家として約170頭の黒毛和牛を飼育している。(34歳)

実家が畜産業を営んでいるため、小さい頃から牛が身近な存在で、よく祖父に連れられてせりを見に行ったり、登校前に牛の引き運動をしたりしていました。

鹿屋農業高校畜産科へ入学しましたが、卒業後は一度でいいから県外に出てみたいという思いから横浜の短期大学に進学。短大卒業間際まで就職先が決まらず、迷っていた時に、当時体調を崩していた祖父から「帰ってきて畜産の仕事をしてみないか」と何度も誘われました。いつかは畜産の仕事をしてみたかったので、「卒業後は畜産をする」と約束すると大変喜んでくれました。

残念ながら祖父はその一週間後に亡くなりましたが、あの時背中を押してくれたおかげで今の自分があると感謝しています。

卒業後はすぐに帰郷し、実家の上別府種畜場に就職。祖父が最後にかけてくれた「気張れよー」の言葉を励みに、毎月休まずせり市に通い続け、周りの人たちに助けられながら仕事を覚えました。

就職して3年目の23歳のときに転機が訪れます。以前子牛を売った北海道の農家の女性から「一度遊びにおいで」と書かれた手紙と航空券が届きました。早速北海道に向かうと、牧場からトラックに乗せ

られ、着いたところは青森の家畜市場。見たことのない血統の牛に戸惑いましたが、その女性や若い人たちが次々に競り落としていく勢いに後押しされ、貯金を全額下ろし初めて牛を落札。1週間かけて何とか鹿児島まで運搬しました。

そして落札した牛を自分の力で育てたいと思い、種畜場を辞め、繁殖農家として独立。当時は周囲に女性の経営者はいませんでした。が、不安よりも誰もやっていないことに挑戦できる喜びの方が大きかったのを覚えています。

繁殖農家の仕事は、ただ産まれた子牛を売ればいいわけではありません。買った子牛を太らせて肉として出荷する肥育農家の人たちが、いかに飼いやすいかを考えながら細部にまで気を配り育てます。最終的に消費者に食べてもらい、美味しいと言ってもらえるのが一番の喜びであり、やりがいです。

技術の進歩で畜産は昔のような力仕事ではなくなっていますが、まだまだきつい仕事というイメージを持たれがちです。私とそのイメージを変え、もっと畜産に携わる人を増やしたいと思っています。日本の貴重な資源である和牛を、いつまでも食べるができるようにこれからも頑張ります。



肝属地区と曾於地区の女性畜産農家との意見交換会を定期的に開催し、悩み相談などを行っている。昨年はフェイスブックで畜産関係者にイベントの参加を呼びかけたところ、全国から50人以上が集まった。